

石川 朗, 種村留美(総編集)

小島 悟, 小林麻衣(責任編集)

15 レクチャーシリーズ 理学療法・作業療法テキスト 運動学実習

評者 宮本重範

神戸国際大学リハビリテーション学部

本書を手にして、ページをめくった後、これは授業にすぐに使える教科書だな、というのが私の最初の印象である。本書の責任編集者であり、執筆者の一人である小島 悟氏は、私が札幌医科大学衛生短期大学部で教員をしていた頃の理学療法学科の学生であり、カナダから帰国後、1983年に札幌医科大学に赴任して以来、私がカナダのマニトバ大学で学んだ先端的な運動学の理論と実践的な運動学実習を理学療法学科、作業療法学科の学生達に伝え、理解してくれたその一人である。

特に実習の授業において、最初は学生達には肌を露出することに恥じらいや戸惑いが見られたが、女子学生には脊柱等を触診しやすい特注のガウンを着用するなどの工夫によって、男女差なく実習を円滑に進めることができ、かつ、学生が患者の気持ちを理解できる機会にもなったと思う。

理学療法士、作業療法士の学生にとって、運動学は臨床医学や特に専門理学療法学を理解するうえで大変重要な基礎学問である。最初は身体のランドマークや筋を正確に触診でき、繰り返し練習することによって関節の動きの違いも感じとれるように触診の感覚を磨くことが望まれる。

近年、文部科学省は授業科目のシラバスの作成に関して各項目の記載法を、細かく指導している。そのため、シラバスは学生に対する教科目の学習指針となるよう、学生に理解しやすい記載としなければならない。

本書はその指導に則り、15回の授業に合わせて15章の構成となっており、各レクチャーは、適切に配分されていて、冒頭には「到達目標」、「学習の仕方」および「何を理解すべきか」を明確に示している。学生だけでなく、教員にとっても大変わかりやすいテキストと言える。また、サイドノートには「MEMO」や「ここがポイント」、「気をつけよう！」

の補足記事が充実していて、理解を助けている。

具体的には、まず私がこれまで強調してきた生体を知るための触診のレクチャーが1〜7章まで組まれている。次に静的姿勢の観察および種々の動作分析、歩行分析など、視覚的あるいは機器を用いた測定の方法がわかりやすく記述されている。さらに、運動時の呼吸・循環系の動態を診るための基本的な知識および試験法についても解説している。これまでの運動学実習の教科書に比べ、著者らのライフワークでもある機器を用いた種々の測定法がわかりやすく述べられている。また、各レクチャーにおける実習課題についてのレポートの書き方およびプレゼンテーションの仕方が巻末に記載されているため、学生は悩むことなく取り組める。

とにかく、本書は15回の講義の学習の目的、履修方法が明快であり、学ぶ側にとっても教える側にとっても使いやすい、理解しやすい良い教科書と言える。



A4判・200頁・2色刷
定価：本体2,400円＋税
中山書店刊、2016年